

Title	実存的転換の臨床心理学的考察
Author(s)	橋本, 朋広
Citation	大阪大学教育学年報. 3 p33-p.42
Issue Date	1998-03
oaire:version	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/12133
DOI	
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

実存的転換の臨床心理学的考察

橋本朋広

【要約】

本論の目的は、実存的転換のプロセスにおける苦悩の意味を臨床心理学的観点から考察することである。実存的転換とは、危機的状况におかれた個人が、それまでとは異なる世界観・価値観を獲得することによって危機を乗り越えることである。実存的転換のプロセスにおいて特に重要なのは、苦悩を取り除かれるべき不幸として見る視点が転換されることである。苦悩の体験を通過することによって、人は死すべき運命を背負った人間の限界を認識し、成長や発展を過大評価する英雄主義を相対化する。そして、人間の限界を超えた運命的な力が感じられることで、世界は単に自己中心的・世俗的関心から眺められるのではなく、その根源に神や霊や生命が息づくコスモスとして認識されるのである。実存的転換の例として、難病患者の障害受容とイニシエーション過程における変容が取り上げられる。

1. 危機における実存的転換

危機とは、これまで自分に役立ってきた対処機制を用いることによって容易に解決できない問題に直面している状況であり、そこで人は著しい緊張と不安に襲われ、情緒的に動転し、自分では問題解決に取り組めないような無力感を感じてしまう (Aguilera & Messick 1974、訳書 1986)。言い換えれば、人は危機において、それまでの自らの生き方を転換するよう求められているのであり、「癒される」とは、その転換がなされるということである。従って、心に傷を負った人々の癒しに関わる心理療法家にとって、危機における生き方の転換がどのようになされるかを知ることは非常に重要である。特に、限界状況とも言うべき深刻な危機において根本的な生き方の転換 (実存的転換) を成し遂げた事例は、我々に「癒し」の根源的契機を教えてくれると思われる。以下では、難病患者の障害受容研究とイニシエーション過程の研究を概観し、実存的転換のプロセスを考察したい。

2. 難病患者の障害受容

神谷 (1990) によれば、難病を受容して生きる人々では、その心の構造が変化している。彼らの心は「社会化」「歴史化」「精神化」されている。社会化とは自分は人類の一員であるという意識を持つことであり、歴史化とは自分の生が歴史の小さな一翼を担っているという意識を持つことであり、精神化とは認識・思索・審美・創造など現世的価値を越えたものを志向し、そこに精神の自由を見い出すことである。

Wright (1960) は、障害の受容における価値変化について、「価値範囲の拡大」「障害の波及効果抑制」「身体の価値下げ」「比較価値から本質価値への変容」の四側面を指摘している。障害の波及効果抑制とは、一部の身体機能の喪失にこだわる余り、それを人格的価値の低下に結びつけ

る考え方を抑制することである。比較価値とは、その基準が他者との比較にあるような外在的価値であり、本質価値とは、その基準が本人に固有な内在的・人格的価値である。Wrightによれば、障害の受容とは比較価値から本質価値への変容であり、そのプロセスは価値範囲の拡大・身体の価値下げ・障害の波及効果の抑制などが相互に影響しながら展開する。

神谷が述べているのは価値領域の拡大であるが、「社会化」「歴史化」「精神化」のいずれにおいても重要なのは、それが「自我を越えたものに対する畏怖」と「それに対する自我の従属」を本質的特徴としていることである。Wrightの研究も、障害受容においては身体的障害をより大きな本質的価値に従属させることが重要であることを示している。このことは、筆者（1997）の難病（筋萎縮性側索硬化症）患者の障害受容研究でも明らかになった。

〔事例〕 Aさん 女性 41才

23才出産直後に声が出ないなどの症状が現れる。次第に病気が進行する中、4年後の27才の時に告知を受ける。夫、母、長男と暮らす。病気をして7年間、彼女は孤立し、自分じゃないように感じたと言う。うまく話せず、容姿が衰え、他者からの奇異の目に晒される。それらは20代の彼女の胸の中を劣等感で一杯にし、彼女はその苦痛を避けるため「心を閉ざした」のである（他者との隔絶感）。しかし、子供を育てなければならぬという「絶対的責任」が、その時期のAさんを支えたようである。「子育ては、自分育てとも言われますが、私も心の中で泥んこになりながら、一緒に成長してきたのだと思う」と彼女は言う。彼女は子育ての中でゆっくり自分を回復していった（家族の中での心理的役割の確保）。

そして、子供が成長し、手が掛からなくなると、Aさんの心にも自分を振り返る余裕が生まれる。彼女は他者の視線や振る舞いに傷つきながら、次第に他者の評価を当てにし、人を外見で評価する自分こそが劣等感を生み出しているという苦の悪循環を認識し、その価値軸で自分を評価することから距離を取る（欲望のもたらす苦の認識）。

こうして、彼女は人間の欲望の営みが本質的に持っている苦を認識し、その外にあるものに目を向ける。彼女は自分の人生に光と闇を同時にもたらした自然というものに人間の欲望の計らいを越えた超越的な力を感じ、自分をそこから生み出されたものと見なすのである（生命に対する畏怖・自己の被造物性の認識）。Aさんは自分を「田の畦に咲くレンゲ草」と呼ぶ。そこには、一生命としての自分がある。「すべての生物を生物たらしめている原動力には、必ず何か一つの使命、義務が与えられ、生を授かっている」と言うように、Aさんは小さな生命として世界に存在する自分を認識する（生命の存在原理の認識）と同時に、この生命から生まれてきたという事実自らを根拠づけようとする。彼女は自分の使命を探したいと言うが、それが見つかることより、それを求めるということが大切だと言う。自分は生命として何らかの根拠に支えられているという感覚、それこそが苦悩の中に自己を見出す支えになるのである（生命として自己が根拠づけられる感覚）。

Aさんの事例から分かるように、欲望という闇がもたらす苦を認識することによって、彼女は人生に光と闇をもたらす、その根源的力としての生命に出会う。それは、圧倒的力を持ったヌウメン的なもの（Otto 1917、訳書1995）との出会いであり、彼女に自己の被造物性を認識させた。

そして、彼女の存在は生命原理に従う生命の一員として根拠づけられるのである。ここで、彼女の癒しの最も重要な要素は、彼女が苦悩を自らの欲望が生む幻想として自覚的に捉え直したことである。つまり、彼女は初め病気や障害者に対する差別に囚われ苦しんでいたが、そこに他者からの評価を気にする自己愛欲求が入り込んでいることを洞察し、その欲求から自由になろうと決意することで苦悩に対する態度変更を可能にし、苦悩に対する自由性を獲得したのである。

3. イニシエーション過程における変容

一般に「トランス状態になって霊的存在と交流し、その過程で予言、占い、治療行為などを行う宗教的職能者」（松岡1995、p.148）をシャーマンと呼ぶ。日本で良く知られているシャーマンとしては、東北地方の「イタコ」、沖縄の「ユタ」などがあり、また多くの新宗教の創始者たちもシャーマン的特徴を備えている（天理教・大本教など）。

シャーマンになるには、大きく2つのタイプがある。一つは、原因不明の病気や度重なる災難といった出来事を通してシャーマンになるタイプであり、それらの苦難は神や先祖霊から選ばれたしるしとして解釈されることが多い。二つ目は、自分から修行して霊的な力を身につけるものである。

前者「召命型」シャーマンが経験する苦難としては、離婚・性的不合・家族間の争いなど人間関係における葛藤、幻覚・幻聴などを伴った腹痛・頭痛などの身体的異常があり、それらが複合的に生起している。沖縄のユタ研究によれば、ユタは幼少からの複雑な人間関係を背景に成人し、家族間葛藤や身体異常に見舞われ、超自然的・聖的な幻覚・幻聴を伴う心身異常「カミダーリイ」を経験する。カミダーリイにおいてユタは、夢で毎日のように神霊や祖霊に儀礼的行為を命じられたり、実行しないと激痛に襲われたりと、徹底的な他動的・不可避の苦悩を経験する。多くのユタは、初めユタになることを拒んだまま、聖なる苦悩から逃れようと抵抗するが、それが近代医学の治療対象にならないこと、先輩ユタにカミダーリイ現象と診断されること、聖なる儀礼を執り行うことでカミダーリイが消失することなどを通し、神霊や祖霊に従う決意をし、先輩ユタのもとでの修行に入るのである。

〔事例〕

那覇のユタ的人物（正式なユタではないが、ユタ的活動をしている人）Hさん（女性・57歳）は、事業を手広く行い成功した夫と子供達（男三人・女一人）と幸福に暮らしていたが、40歳半ばの時に自ら相互扶助的金融組織に手を出して失敗し、財産の大部分を失った。姑や夫との関係が悪くなった彼女は、救いを求めて宗教団体S会に入信し、夢中で宗教活動に打ち込んだ。そのため、家のことは疎かになり、家族関係は一層悪くなった。金融に失敗した時、周囲の人々はユタに行くことを進めたが、彼女はそれを逡巡していたということである。一年ほどで彼女はS会の方針に疑問を抱き脱会している。程なく彼女は体の変調を感じ、極度の不安状態に陥った。体がだるく、アパシー状態になり、寝ていると深い穴にドスンと陥るような、じわじわと引きずり込まれるような気がして落ち着いていられないようになった（カミダーリイ）。この頃の彼女は、

豪華な冠をつけ金襴の衣装をまとった男性（祖霊イメージ）に書物を与えられる夢、天皇や皇后に仕える夢、自分が死んで湯灌されている夢などを見ている。また、祖霊が取り憑いて体がふるえることもあり、その時は塩をなめて、どうか離れて下さいと祈ったらしい。そのような中、ついに彼女はユタを尋ねたが、全てのユタに先祖の世話をしなければならぬと言われ、神社や御嶽を巡拝し先祖供養すると、不思議にも病状は好転した。彼女は自分の境遇を、「自分が事業に失敗したり病気になるのは、先祖の頼みごとを無視したことにたいする先祖の警告であった」と受けとめている。（佐々木1994、pp.42-45より要約）

金融に失敗する以前の彼女の幸福は、社会的な意味方向としては上昇の方向である。この時期における彼女が、自らの故郷・伝統といった大地性を十分意識して生きていたか、それは明確ではないが、金融組織に手を出したこと、ユタへの逡巡、S会への入信という出来事の系列を見ると、彼女の生の方向性が俗的な上昇であり、自らの大地性が疎かにされていると見ることができる。それに反して、カミダリーイの意味方向は、大地への引きずり込み、伝統の継承に見られるように大地への下降の方向であり、また自我の死や天皇への奉仕などは、聖なるものへの屈服といったテーマを示していると思われる。以上から、俗的な上昇へ駆り立てられていた彼女において拒絶されていたのは、自己を死の必然性を背負った存在、伝統に基礎づけられた存在として認識することであり、聖なるものに奉仕しようとする帰依の精神であった。シャーマンは、俗的存在としての自己の限界を徹底的に認識させられ、限界を超えた聖なる存在に仕えることで、自らの生に聖性を見いだす。Eliade（1958、訳書1993）は、主にシベリアのシャーマン研究を通して、入巫儀礼の重要な要素として次の五点をあげている。肉体の責苦と解体、肉を剥ぎ取り骸骨に還元されること、内臓の取り替えと血の更新、冥界において死んだシャーマンの魂や魔から教育されること、天上神から聖別をうけるために天上界へ上昇すること。これらが示すように、シャーマンは聖なる力によって俗なる存在様式を徹底的に解体され、生命の根源に立ち返り、聖なる存在と交流し、聖なるものへの奉仕者として訓練されることで、自らの生の聖性に目覚めたものとなるのである。

この入巫儀礼の要素は、伝統社会における成人式にも見られる（Eliade、前掲書）。先ず少年は、それまでの俗的な母なる世界から超人間的存在によって強制的に分離させられる。闇夜に神や魔物の声が響き（ブル・ローラーなどの音）、少年は突如として連れ去られ、村人には少年は神や怪物によって殺され、再び生き返させられると告げられる。少年達は森の奥深くに隔離され、小屋に閉じこめられ、眠ることを禁じられ、体に傷をつけられ、仮面を付けた悪魔のような存在に出会い、圧倒的な苦痛と恐怖の中におかれる。そして、少年は苦痛と恐怖の直中で圧倒的な力を持つ超人間的存在に出会い、神や先祖に関する神話を教えられ、圧倒的な力を持つ存在の聖性を体験する。彼らは、その存在の神秘を他言することを禁じられ、聖なるものの秘儀を通過したものとして聖性に目覚めた存在となるのである。成女式では少し事情が異なる。少女は初潮が訪れると隔離され、村の老女などから女性の領域に関する知恵を学ぶ。ここで、少女たちに語られる知恵は、身体其自然性に即して語られ、自然の運行に従うことを中心としている。この隔離の期間、少女は様々なタブーを課せられ、例えば、女性が月と関連づけられ太陽を見ることを禁じられたり、地面に触れては行けないと言われハンモックで寝たり、食物の制限を課せられたりする。

少女は自然という、それ自体神秘的な存在の運行に従って生きる態度を身につけるのである。ここでは、周期的に力強く回帰してくる豊饒の力こそが聖なるものであり、女性は自らの内にある圧倒的な力の聖性に目覚め、それに従うことで自らの生に聖なる意味を見いだすのである。

以上から分かるように、人間は、圧倒的な力をもって苦悩その他の不可避な出来事をもたらす存在に目覚め、それに従う時に、圧倒され翻弄される卑小な自己の生に聖性を見いだすのである。これこそ、イニシエーションの秘儀なのである。

4. 実存的転換のプロセスと心理療法

難病患者の障害受容とイニシエーション過程の研究を通して、圧倒的苦悩の中で人はどの様に癒され、主体性を回復するかが見えてくる。

(1)不治の難病、異常な精神症状などの体験によって、主体は全く圧倒されそうになる。主体は初め、圧倒的な異常体験に抵抗し、苦難それ自体に働きかけようとする。病気を治そうとし、異常体験を打ち消そうとする。それらは、圧倒的な力で自らを展開しようとする運命への抵抗であり、主体が打ち消され、飲み込まれることへの抵抗であると言える。ここでの主体は、秩序を守り、独立性・分離性を持った自分を維持しようとしているわけだが、それは自我の働きである。しかし、その努力は悉く打ち破られ、主体は自分が全くこの世を越えた力に支配されているという意識、酷く無力なものであるという意識を持つに至る。ここで重要なのは、日常の秩序を破壊する力、主体を呑込もうとする力によって、自我の働きが徹底的に無力化され、それが相対化されてしまうことである。

(2)次に徹底的に自我の働きが無力化されると、主体は苦難への恐れや挫折から空虚な状態に陥り、他者から孤立し、混沌の中へ埋もれてしまう。ここで重要なのは、この混沌を包み込む容器である。つまり、難病患者Aさんの事例では、抑鬱状態に陥った時、彼女は家の中に閉じこもり、ただ子供とだけ向かい合っていたのだが、その生活空間をじっと支えた家族の努力は無視できない。イニシエーション過程でも、先祖供養のため神社や御獄への巡拝はある種の籠りであったろうし、身体的苦痛の中で神話を聞かされ続けることも籠りの体験と見なせるであろう。混沌を閉じこめた容器によってエネルギーの反乱は防がれ、主体は完全な破滅から守られつつ、混沌のうねりの中で残り続ける中心のような感覚が保たれる。これは創生神話の中心の発生と同様な現象である。おそらく、圧倒的な苦悩の中で一つの行に集中することが中心の感覚を生み出すのであろう。分裂病の危機克服過程をJung心理学の立場から研究した織田(1994)も、治癒過程における中心の重要性について指摘している。彼によれば、中心の成立こそ、意識と無意識の分化の出発点である。つまり、中心の成立によって徐々に人は圧倒的な混沌に距離を取れるようになってくるのである。そして、この感覚が生まれてくると、それまで圧倒的に迫っていた苦難に向き合う主体の力が回復し、圧倒的運命に自我を越えた聖性が感じられるようになり、主体は意図的な活動から運命的な活動に自らを投げ入れるようになる。それは、子育てであったり、先祖供養であったり様々であるが、最も重要なのは「したいことをする」ことではなく、「それをするしかないこと」「それをするように命じられたこと」に打ち込むことである。主体は独立性・分離性

への固執から抜けだし、圧倒的で聖なる力に身を任せて融合する受動的な主体性を身につけるのである。人生の転機（transition）に関するワークショップを行っているBridges（1980、訳書1994）も、人生の転機のプロセスを「終わり（それまでの生き方が終わること）」「ニュートラル・ゾーン」「始まり（新しい生き方が始まること）」に分け、ニュートラル・ゾーンの重要性を述べている。つまり、ニュートラル・ゾーンにおいて人は深刻な空虚感に陥るが、逆に日常な生活から引きこもり内向することで、日常的意識とは違った感覚を鋭くし、イメージを象徴的に体験することができるようになる。空虚の中で受動的に生きる能力は、危機の転換に欠かせないものと言えよう。

(3)この運命的活動への没頭によって、徐々に彼らの日常世界は豊かな展開をはじめ、それまでとは違った世界の見え方が可能になる。難病患者のAさんは、苦行のような子育てへの没頭の中で生命の限らない力を再認識し、自我の卑小さを認識し、イニシエーション儀礼においては、神話の展開に従って圧倒的な脅威や解体の執行者が創造神として立ち現れるようになる。それまで否定的に見られていたものの中に肯定的な意味が見え出すようになり、悪は善への展開を秘めた可能性として、弱さの認識は強さに対する強迫からの解放として、不自由な身体は選択可能性の意識を鋭敏にするきっかけとして見えてくるのである。彼らは、対立物の弁証法、二律背反の弁証法的認識を身につけることで、自我の独立性・分離性への固執から解放され、自我の卑小な俗性を越えた力に能動的に従属する姿勢を獲得し、そこに聖なる存在可能性を見いだす。彼らの生は聖なるものによって根拠づけられるのである。

苦悩の実存的転換の研究は、心理療法に対する重要な示唆を与えてくれる。それは、「混沌たる苦悩の容器」「聖なる力への能動的屈従」という視点である。

混沌たる苦悩の容器とは、Jung（1958、訳書1996）が錬金術研究において明らかにしたように、そこで対立物の結合がなされる場であるが、変容の途上においては密閉された容器の中での「腐敗」「黒化」の過程が不可欠である。具体的に言えば、クライアントの無意識に潜む悲しみや憎しみの破壊的エネルギーに晒され、傷つけられながらも、なおクライアントと共に揺るがずに無意識の根源を見つめ続けようとするセラピストの姿勢は、それ自体悲しみや憎しみを入れ込む容器であり、また同時にセラピストのそのような姿勢に接することでクライアント自身その憎しみや悲しみを自らの人生という容器の中に入れ込み、なお崩壊しない主体性を身につけるのである。密閉された容器の中でじっくりと怒りや悲しみが凝固してゆくことによって、その破壊的エネルギーは味わい深い聖なる食物へ変容するのである。境界例の治療において患者は自ら持ちきれない悲しみや怒りを吐き出してくるが、セラピストがその怒りや悲しみに傷つきながら、安易に自分の傷つきを吐き出そうとせず、それを自ら抱えながらクライアントに関わることで、クライアントは自らの吐き出した怒りや悲しみを再び抱える勇気を得るのである（渡辺、1988）。「先生は死の話をして逃げなかった」というクライアントの言葉は、容器としての治療者を示しているし、何よりもクライアントの心に死の恐怖を入れ込む容器が生まれたことを示している。ユング派分析家の織田（1993、p.261）は、「比較的任意の分裂した治療者の心の一部が、病者とほとんど同一の変容過程、そこにはしばしば死と再生の体験をともなうが、そのような変容過程を含む世界を生き抜くこと」を「変容的逆転移」と呼ぶが、セラピストが容器であろうとすることは自ら内的に死と再生を体験するということなのである。

治療技法的には、苦悩から逃れようとして悪循環を繰り返しているクライアントに、苦悩が抱えられるよう、その悪循環が見えるようにすることが大切で、それは苦悩の真っ直中で足元を固めようとすることである。神田橋（1991）は、これを「眺め・語る二等辺三角形の関係」と表現する。これに対するのは、クライアントの吐き出す苦悩をセラピストが取り除くという「やる・とるの二者関係」（神田橋、1991）であり、これは結局治療者が容器となる苦痛に耐えきれず、その苦痛を吐き出していることである。「眺め・語る二等辺三角形の関係」を形成してゆくためには、先ずセラピストがクライアントとの関係における自らの傷つきを生き抜き、その直中で傷つきを見つめ、その傷つきを生じさせてくる関係そのものの構造を読み取り、その構造におけるクライアントの体験構造を推測し、それを伝達してゆくことが大切になってくる。例えば、やる・とるの二者関係が成立している場合、クライアントの苦痛を取り除いているのは二者関係自体だから、クライアントは一人になった時の不安を抱えきれず、その苦しみから逃れようとして「苦しみを感じている自分」を打ち消そうとする。やる・とるの二者関係に入り込んでいるセラピストは、ここで「自分はクライアントに安心を与えることができなかった」という無力感を体験する。しかし、この無力感は「クライアントが苦痛を訴え、セラピストがそれを取る」という関係構造を基盤にしおり、それは「苦痛を取り除く関係を維持できなかったセラピストの悲しみ」である。この関係はクライアントに他者に苦痛を取り除いてもらう態度を維持させるため、クライアントは一人になった時の苦痛のやり場を失い、苦痛を感じ、そして「苦しみを感じている自分」を打ち消そうという行動化に出る。ここで、もしクライアントに「苦しくなると自分の苦痛を誰かに取ってほしくなり、それが適わないと苦しみを感じている自分を消したくなる」という体験構造が見えており、しかもその体験構造の由来まで探られているなら、クライアントは自分の苦しい感じを抱えやすくなると思われる。

聖なる力への能動的屈従の視点は、セラピストに苦悩に対する敬意を生み出す。セラピストになりたいと思う人は、人を助けたいと思う気持ちもまた強く、従って、往々にして苦悩する人を安心させたいという気持ちに駆られて、人に関わってしまう。この気持ちが安直な方向に働くと、クライアントと一緒にあって苦悩そのものを取り除けるかのような幻想に取り込まれてしまう。そして、同情に満ちた態度で「私がいるから安心して」というようなメッセージを無意識にクライアントに伝えてしまい、こうなるとクライアントがセラピストという時は安心できるが、一人になると自殺行為を繰り返したり、セラピストに強迫的に電話をしてきたりする。もちろん、このようなメッセージが無意味なものではない。大切なのは、一時は二人がいれば苦悩の地獄から逃れられるという共同幻想が治療的に働くにせよ、セラピストはクライアントが苦悩を抱えていられるようになる方向を見ている必要があるということである。苦悩は取り除けるのではなく、死の恐怖や孤立する恐怖・満たされない空虚感などは人生に不可避につきまとうものであり、それを抱えて生きようとする方向をセラピストは見つめることが大切ではないだろうか。難病患者やシャーマンたちが聖なるものに目覚めた存在として生命の根源を見ることができたのは、まさに苦悩のもたらした恩恵だとすると、他者から苦悩を取り去ろうとすることは、その人の存在を可能にしている生命への冒瀆になるのではないだろうか。もっとも、心理療法はつねに二律背反状況の中で展開されるものであるから、結局人を安心させたいという幻想もまた二人の出会いが作り出す必然性を帯びているのかもしれない。セラピストの治療観や治療技法も出会いの前では、卑

小な自我のあがきかもしれない。加藤（1996）は治療的出会いの場が自ずから患者と治療者を癒してゆく、その根源的自律性を「寂体」と呼んでいるが、我々心理臨床家は、その寂体のうねりにひたすら謙虚に歩み寄ろうとするだけである。

5. 構造と実存¹⁾

危機における実存的転換は、状況と個人との密接な関係を明確に示してくれる。危機とは個人の側から見れば、自我を越えた運命が圧倒的な力によって展開しようとしている状況であって、その展開は個人の意志の及ばない運命それ自体の構造に基づいて動いている。つまり、個人が病気になると、その個人を取り巻く社会的・家族的状況の構造は自ずと変化する。そして、病気に伴って個人が苦悩を体験したり、病気克服の努力をしたりするのは、単にその個人の自我の働き如何によるのではなく、状況の構造の力動に無意識に規定されている。難病患者を孤立に追い込む力は、労働と生産を重視する社会・文化的価値観であるし、シャーマンを生み出す力は、ある種の精神病を神の言葉として理解しようとする伝統文化の存在である。更に言うならば、病気という出来事自体、個人が生きている生態学的状況の構造から生じてきた一つの現象と言えるかもしれない。未だその理由は明らかでないものの、ALSは以前ある限定された地域に頻繁に発生した病であったし、カミゲーリは周囲の人間関係との縫いを背景としている。構造主義が示したように、状況における個人の行動は、状況を構造的に規定している歴史的・文化的コンテクストに規定されているのであり、状況の構造による無意識的な規定が、現象的には「自分ではどうしようもない」という感じを個人に与える。

しかし、危機の状況において苦悩を感じているのは、まさに個人である。その苦悩は、自分が世界から断絶してしまうかもしれないという怯え、自己の自己性が崩壊してしまうかもしれないという怯えである。つまり、自らの構造に従って展開しようとする世界に対して、一方では自己の自己性の崩壊に怯えつつ、世界との関係を何とか成立させようとしている個人が存在している。しかし、状況の構造的変化によって、それまで成立してきた個人と世界との関係は維持できなくなっており、その関係の断絶が個人の意識に自己の自己性の崩壊として現れているのである。つまり、個人は世界との間につねに緊密で有機的な関係を成立させているのであり、逆に言えば、個人の個体としての統一は世界との緊密な関係の上に成り立っていることになる。自己の自己性や主体性の感覚は、この世界と個人との間の有機的関係が個人の意識に現れたものということになる（木村1990）。詩人の直観が適切に表すように、「わたくしといふ現象は、有機交流電燈の、ひとつの青い照明」（宮沢賢治1995『春と修羅』「序」より）なのである。このように考えると、危機において、個人は状況の構造的変化に無意識的に規定されながらも、世界との新たな関わり方を見出そうとしていることが分かる。逆に言えば、個人は、状況の構造の絶え間ない変化に直面し、その断絶の中で世界との新たな関わり方を発見することで、同一性を獲得しているのである。危機における実存的転換とは、状況の構造と個人の実存の弁証法から生じてくるのである。おそらく危機において、状況の構造的変化は初め圧倒的な力を持った運命として個人の意識に現れるが、そこに個人の実存的決断が入り込み、構造と実存の弁証法的緊張関係生じることで、そ

の圧倒的な力は個人の意識に聖なる力として現れるようになるのではないだろうか。Jung心理学で言う「コンステレーション (constellation)」とは、この構造と実存の弁証法的関係のことを示すと思われる。そして、元型的イメージとは、まさにこのコンステレーションそれ自体から生じてくるイメージであり、夢において展開しているのは、このイメージなのではないだろうか。

我々は、客体化・均質化された物質に結びついた日常的・表層的意識の世界を生きていると同時に、構造と実存との弁証法的関係から生じてくる非日常的・深層的意識の世界を生きている。前者は、現代においては主客二元論を基礎として成立した科学的世界観であり、そこでは物質的現実が強力な力を持ち、神々は排除され、神や霊の登場するファンタジーは単なる空想とされてしまう。我々は、ともすればこの世界観に従い、物質的幸福や社会的適応のみに心を傾け、自らの人生を何気なく生きてしまいがちである。その場合、人は押し付けがましい客観性・合理性に盲目に従うばかりで、日常だけが現実になり、毎夜深みから生じてくる夢は無意味な空想として切り捨てられ、人生は快樂と苛立ちが頻繁に点滅する虚しいものとなる。後者においては、病は単なる医学の対象でなく巨大な悪魔や先祖の恨みとして現れ、大人になることは単なる会社員になることでなく戦場の英雄や未知の世界へ旅立つ冒険家になることとして現れる。後者の世界を意識的に生きることで、人生はかけがいのない意味深いものとなり、自分を取り囲む世界は聖なる時間と空間に満たされたものになるのである。心理療法家は、クライアントと共に彼のファンタジーを共有し、この科学的世界観が強い影響力を持つ世界の中で、個人の深層の世界が現実化するのを援助しようとするのである。

<注>

(1) 本節は、危機と主体に関する木村(1990)の考察を基礎に、構造と実存の弁証法的関係をより臨床心理学的観点から見直している。

<文献>

- Aguilera, D.C. & Messick, J.M. 1974. Crisis Intervention. The C.V. Mosby Company. 小松源助・荒川義子訳. 1986 『危機療法の理論と実際』川島書店.
- Bridges, W. 1980 Transition. Addison-Wesley Publishing Company. 倉光修・小林哲郎訳. 1994 『トランジションー人生の転機』創元社.
- Eliade, M. 1958. Birth and Rebirth. Harper & Brother Publisher, New York. 堀一郎訳. 1993 『生と再生ーイニエーションの宗教的意義』東京大学出版会.
- 橋本朋広. 1997 「難病患者の苦悩の癒しー筋萎縮性側索硬化症の事例を通して」『心理臨床学研究』第15巻5号: 513-523.
- Jung, C.G. 1958. Die Psychologie der befragung, GW16. Rascher Verlag. 林義道・磯上恵子訳. 1996 『転移の心理学』みすず書房.
- 神谷美恵子. 1990 『生きがいについて』みすず書房.
- 加藤清. 1996 「真の癒しへの黄金の糸」加藤清監修『癒しの森ー心理療法と宗教』創元社: 187-225.
- 神田橋條治. 1991 『精神療法面接のコツ』岩崎学術出版.
- 河合隼雄. 1994 『心理療法序説』岩波書店.

- 木村敏. 1990 「危機と主体」『分裂病と他者』弘文堂：141-151.
- 松岡悦子. 1995 「宗教と世界観」波平恵美子編『系統看護学講座基礎9文化人類学』医学書院：135-165.
- 宮沢賢治. 1995 『新編 宮沢賢治詩集（天沢退二郎編）』新潮文庫.
- 織田尚生. 1993 『昔話と夢分析』創元社.
- 織田尚生. 1994 『王権の心理学』第三文明社.
- Otto,R. 1917. Das Heilige. 山谷省吾訳. 1995 『聖なるもの』岩波文庫.
- 佐々木宏幹. 1994 『シャーマニズムの世界』講談社学術文庫.
- 渡辺雄三. 1988 「心理療法過程における腐敗について」『心理療法と症例理解 病院心理臨床の実際』誠信書房：167-196.
- Wright,D.A. 1960. Physical Disability —A Psychological Approach. Harper & Row, New York.

<ABSTRACT>

A clinical psychological study of existential conversion

Tomohiro HASHIMOTO

The purpose of this paper is to discuss the meaning of suffering in the process of existential conversion, from the viewpoint of clinical psychology. Existential conversion is that facing a crisis, a man gets through it by conversing his view of the world and his sense of values. In the process of existential conversion, it is very important that the viewpoint is conversed from which suffering is regarded as thorough unhappiness and considered that it must be gotten rid of. By experiencing great suffering, the mortality and the limit of human being are recognized, and heroism which overestimate growth and development is relativised. And feeling the power beyond mortal ken, a man not only has a ego-centric and wordly interest in this world but also comes to regard it as the cosmos where there are gods, spirits and so on. Two cases, acceptance of disability of incurable disease and transformation in initiation process, are discussed as examples of existential conversion.